

海軍 航空部隊

海軍航空隊工作科勤務の四年

香川県 鈴木 十四男

私の生家はサラリーマン家庭で、父は地元の「マルキン醤油」に勤めていました。母は主婦で内職に玩具屋をやっていました。

学歴は地元の苗羽尋常高等小学校を昭和十（一九三五）年三月卒業しましたが、父の転勤に伴い神戸に移り、神戸市下山手青年学校を昭和十三年卒業。昭和十五年十二月に下関に移り、桜山青年学校を卒業しました。私も父と共にマルキン醤油に勤めました。マルキン醤油の支店、出張所が各所に在りましたので転々と引越したのです。

昭和十五年五月に徴兵検査を受けましたら「甲種合格海軍」と言われ、同伴した役場の兵事係が「海軍」と言われたのは初めてですとビックリしていました。そのころの日本を取り巻く情勢は日ごとに險悪になりつつありましたので一日も早く軍隊に入りたく思っていました。

待望の佐世保海兵団に昭和十六年一月十日入団せよとの通知が届きました。海兵団の新兵教育は三カ月間。毎夜整列してお尻へ精神棒（野球のバットの太いやつ）を叩き込まれます。一人でも悪いと団体責任でやられます。立ったままだと倒されるので壁に手を付いて支え、尻を突き出す形になって叩かれるのです。連日叩かれると尻が黒くなり便所で用を足すときの痛さに泣く思いでした。

陸軍のビンタと海軍の精神棒はいづれも下級兵士の恐怖の的でした。

入団して三カ月で海兵団を卒業して三等兵となり、四月一日付けで久里浜工作学校に入校、工作学校には溶接、旋盤、仕上、機械、木工、鍛冶工、潜水の教育科目があり、各自の得意分野を選べるようになっていましたので、私は鍛冶工を選びました。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まる。

十二月十日、工作学校卒業、佐世保海兵団に二週間滞在していたら、二十五日に朝鮮の鎮海海軍航空隊付きに任命されました。

仲間四人と関釜連絡船に乗り釜山上陸、鉄道で鎮海海軍航空隊に到着、工作科に勤務することになりました。この工作科の編成は初年兵四人、十五年兵（私ら）四人、十四年兵二人、召集兵三人、下士官二十三人合計三十六人で二個班編成となりました。初年兵四人の中から将校の従兵として一人が指名されました。

夜間訓練中の偵察戦闘機が着水に失敗する事故が発生し、その救出作業に工作科が出動しました。潜水して搭乗員の救出に当りましたが残念ながら事故死されました。事故のときは救出を優先しますが、死亡のときは遺体収容を先にし、翌日、機体引き上げとなります。事故死は戦死扱いとなり後日、格納庫で慰霊祭が行われ、海軍礼式の葬儀が遺族参加の上で挙行されました。一式陸攻機の事故のときは乗員十二人ですから大変でした。

昭和十九年三月、九州鹿児島県麻屋海軍航空隊付きとなり単身赴任しましたが、釜山からの連絡船が、空襲、敵潜水艦の危険が大となり足止めをくいながらの赴任で大変でした。麻屋海軍航空隊には陸軍九八戦隊の「キ67」と呼ばれる重爆撃機「飛竜」が海軍から洋上航法を習得中でした。

十月九日、麻屋から発進した定期の索敵機が敵機の攻撃を受け未帰還となり、米艦隊が沖繩、台湾付近に接近中と予想され、麻屋基地の全機が出撃「捷一号、二号」作戦が発令されました。麻屋

基地から攻七〇八の一式陸攻と研修中の陸軍「飛竜」に海軍の偵察員を乗せて全機雷装で出撃しました。

敵艦隊は遠距離だったので、攻撃は十二日から十五日まで四波、四日間にわたって行われました。その結果、攻七〇八（海軍）は七〇パーセント未帰還機を出して一挙に約二百五十人の戦死者をだしました。（片道五時間半の海上飛行）台湾沖航空戦と称されました。

攻七〇八は、その後「レイテ沖航空戦」にも出撃し、ここでも多数の未帰還機をだし、十一月に内地に引き上げ解隊しました。そして生き残った隊員を含めて「神風特別攻撃隊」「神雷部隊（親子飛行機）」の編成となりました。有名な桜花（人間爆弾）の誕生でした。

昭和十九年十二月、宮崎海軍航空隊付きを命ぜられました。ここにも陸攻ほか各種の飛行隊が駐屯しており「勲（イサオ）」と命名した飛行隊が猛訓練中でした。

昭和二十年一月、召集で上等兵曹が入ってきました。四十歳ぐらいの年配の人でしたが、私に向かって「甲板下士（私のこと）日本は負けるぞ」「なんで」「私は現役のとき、練習艦隊でアメリカに行ったとき、陸上の防火訓練で日本製の手押しポンプで二十階建のビル火災を消す訓練を見て力の差を見せつけられた」。昭和生まれの兵隊が召集で入ってきましたが戦況が日増しに悪化していくのが痛感されました。

昭和二十年二月、大村海軍航空隊付きを命ぜられ、単身赴任し、三十人の工作科に入りました。ここでは「銀河」「紫雲」の修理をやりました。

昭和二十年六月、望月部隊設営隊付きを命ぜられ、宮崎市内の寺を宿舎にする部隊に、工作科五十人が揃って転属しました。学生上りの望月大尉が隊長でした。兵曹長が副官役、私（二等下士）が次いで、水兵、機関兵、工作兵の召集兵ばかりの寄せ集めの雑兵部隊で、仕事はツルハシ、カマの修理でした。

宮崎海岸に米軍上陸に備えての水陸作戦、陣地構築の設営作業隊が任務でした。工作兵は鍛冶工専門ですので工具の修理、製作が仕事でした。

八月十五日、寺でラジオの重大放送を聞かされましたが、雑音で聴取不能のため昼寝をしていたら、街から敗戦の噂が流れてきました。食事は米、麦混合のところ宮崎航空隊時代の顔で白米を調達して帰りました。

八月二十七日に部隊は解散となり、被服、食器、毛布等を持ち帰ることになりました。宮崎からトラックに二十人乗せ出発しましたが、大分県の臼杵でガス欠となり、汽車の窓から飛び乗り、関門海峡を越え、四国まで行き高松で六人下車、解散しました。

一等兵曹のとき、佐世保鎮守府の許可を得て結婚、昭和十九年十月に入籍、家内は小豆島出身です。

復員時の家族の状況

父、母健在。弟（二男）徴用船員で日本商船に

乗り、昭和十九年二月、バシー海峡で被雷、沈没しましたが奇跡的に一人だけ生き残りました。三男は現役で善通寺の第十一師団で高知で終戦、無事復員しました。四男は徴用で堺の住友金属の工場におり無事帰宅、女子は在学中で無事でした。

台湾沖航空戦が始まった昭和十九年十月十三日、麻屋航空隊から一式陸攻隊十七機が十二時三十分発進、台湾南東方面の戦場に到達したのは六時間後の十八時三十分でしたが、飛行隊長長井大尉機以下十五機未帰還戦死、基地に帰ったのは僅か二機のみでした。